玉川日記六編下

へ13
3188
16冊

へ13
3188
16

戒指克用〜内

松下

昭和十年
六月二五日

松月露滴 拾遺の玉川 巻の六

江戸 狂訓亭主人作

第十一回

こゝに小雪久深の大上人松月の視線を尚、衆生濟度の
そのこゝろざしを扶け、因果を説き近在法村を勧化わり
てくらやどにつゝ濟世村に梅を体手世のひろまこび名集まる
道俗男女村中軒毎にうゝて、世の宿業淫欲の苦悩説
法あつまりてまつられく渋茶門に立てまつり

のうまんや在すとまうせしかば世俗人の目の元がくちくて二流
[illegible]どのく松ものの方丈さ及ばぬ山の絶壁や
さやく[illegible]さうしゆまとしらくべうの流義もお弟子
の実他も罪障消滅拝ぐうと和尚より射し礼拝すれば
松島和尚眼をさもち定より入るゆまたべし金縛つはぐり
たるんよりもろの今日王国景のろ浮世ばく[illegible]すり
わうまと例てして海度せしうく雑て仏徳つ大ある[illegible]
まつよれ青唐より一人の大高人ぐどぐりうぐ其ばへ来の

朝夏十代摩宗帝の蓼元二年[illegible]
かの高人段子とう人の弟中殘らど病毒病と拝てるとへ
も娘子も一ようよ死んで夫ぬも脱てよ金ばかもうく玉者も
ちろ稜の寝病よりとまてまくまどきて仏陀の人ものうな
つど看病人ものうれば山ものの根ばかりよりとんとる
ときその年二十ろる段子の二子男が出て山院とと
あ青ろ居ろ脱屋の中ろとてあまひろ素ぐり
つぶ脱の門ろうこんまべまた雪のどためば山の中ふ

あつく敷物の上に震うぶさる思へ姑業と推量して多
くの法つとたのこ拶影の咒とをろく法をろつて数千人
閔氏の家にあつまりて修行すれどかのつるきこもの所の
たまたまく病人の家のりうに巨大の蛇がわいつまきく種文のつ
るあつて自ら形をあらはし人をうちなげて死せる病人をちぐ
さる今度あつまりてその死骸を見ぬ事ぐどざる古れの
閔氏が背人の材家を祈しる根をうけるのやさまども
そのみご一人生死しこ功徳で禍を退れることなるそれふ

紀多元因果の人形を今接しさんぜちしめまとかつ人形為
和尚沙彌さりしと元無門の里ちて見隠こ禍の形ょ出の
て朝月長者とつ人ありとの人年若き時石仕ひの女ようを
つけ妻とるりしと本妻の名ごこあて追ひこひ子ごもの涙
本妻の名ごこすくつよく祈ょ長者の家こ入れ妻長
者の大家ってそもそも屋のよ一書式殘しかの妻子女の名方を
さうぐしその書を出て作ようと祈ょ長者
の名ごいろしかの書を出のあごを視ようひし朝日

長者が館の中にありてより出しくる金銀財宝これ
みて身上仕あげしもとは朝顔やの主なりまたまた長者の
むすめを女房にしてかくするうち実体が妻となり産せし
は男子なり

此門員死初編の末にくはしく合せよみ給ふべく
「うしろは金の山泉は金の黄金今をかがやく朝日のかげを
この長者の長者が出来たり
かくと聞たる実体もおなじくもすみ家に来りしうちかうかうの妻

せうじやの中くも極楽してそれみてゐたりしに「このよへ下る終焉
ひとりの朝顔やも長者がたるもの出来るよしまさびらく
つかひよ出来よその家と尊びまてるとれ長者が一念なり
そのかみ深物の深縁がおほくの草生善者とそのほか親類の
ひどかもまてもおそるべき関係がふかくあらしとひとども御覧
がみな耳をそろへて善悪を像はまはずがあれよそはし
てきつ然べし今より後とは朝顔やそのかの性あるものみを
うそいげしそのその成長いのつてるが深く金元なとつうん

且長者ハ再生して揚りのやの家にあるべし未来のうら
あれとらが此の作男となりて我きりさるゝとうしよ此業
衆生の善悪ハ自然によりて発明あけるとそれハしんと示
さしたれバ実悟も遍義も覚悟和尚の弟子となり
白髪をそりてあん借を結びおりもおもむきて修行して
人を救ふ実の親なる善蔵となる者あらし遍者と秀
ひらもさつよまたのゝ世今この姫をも実よりもちで出
さうる世のあるさる善悪がく遍者をきくべ遍者が文

おもとをたすけとらふ遍者のちからとわつと云いたく
すで然と厳ゆして秘しくも遍者ハ男のうへをあ善蔵よ
かうて春日のうのさて偽あわるう遍経ハふうびし和合
ちの下笹代わびひその教へ尽うけて此小よ前果とうたる
先刻より因果の道理を説出法師のうろくと告げとく
教に入出示むかとよ対面してきのやどの幸吉ととひ
あぐさあるやの旅物を上べよまかし世実悟遍義あ
出源の生涯をつんよりを物せりかる亜へ云許

ゆかんつゝ袖をかたらひあくびの種あひくの法をとしまの
浦の海人のあしとよりの中めづらしやあしとそをとづゝ時後此
ところとゝ住まるあすもろうゝ和歌ごんをゞめとゝゝる
三人の遊君吟味をうけ百姓おの
みらがあしとをうづゝまと性方をうづゝて猶又袖の法を
をうゝぶへつゞ藤宿へ遊への係奇今ゝゝる此まゞの
の船をたる君へつゝまとゞもうれそ方ゝちよとしめつと
うめちゝへまんわうとめゝゝゝゝゝゝゝくその

ゆをつゝをかりわゞ「ゝまと此わゞと山領所のうち
勢多郡ゝ自民人ゝをゝやまをゝの孫ゝのこめ
ゝ法方を孔ゝゝ且今弁指の故者清志ゞ父ゝりと
ゞけゝゝ和歌ゝゝゝ和歌ゝゝゝ和歌ゝゝゝ
ゝ和ゝゝゝゝゝゝ清志ゞ娘を今ゝかゝて妻とゝて
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゆまゝつゝゝ和歌中のゝめをゝゝゝ清志と和今ゝと
て今ゝをなゞゝゝゝ和歌ゝゝゝ和歌ゝゝゝ
和歌ゝゝゝゝゝゝゝゝ竹のゝ老婆と同

錫を飛ばして
因縁をとく
現幽和尚

じく菩く流しよ会せられてことれまし〻かう領
も主の御蔵光法名も元御預りの法号が実子なれば
物来殿の御菩提をとむらうてぞんじたてまつるといひ
うそし理幽和尚よ一礼して然るに心で私ふ仏
一村の道俗男女は和尚さまの教化をうけ是を有がたがり
らひをあらひておもく善心をおこし実化法の親友
法師のいふよ庵をこしらへて住せんとを請ふかく
かくてか理幽和尚は従人とふかく有てと勧め

せしまゐるがよいと和吉藤江が秀江が身の上をつくづくあ
親や兄弟に別れを告る孫右が夫婦もようやうまことに頼みやく
かくて和尚ハ蜂須賀の世話をとりつく浅吉秀江が
またそれより我の存るゆへさとその後に浅吉藤江とへ
それより又かへりて足を門徒の教へめをとゐし藤江が
妙ハ桐谷屋よりいふて我もよのを起して翁ひ首
屋もよく弟子せんと云ふをそのつぐもふとも今へ懐し
さかうしてゐるをたゝみて藤江が子をよくやく発んるを

たのしとふ為めの神や仏のり碁将棋をなす
うり咲人心の空めるき時るる今月とかうめく是も
浮世ろおりしろきく人くさるぐくのまうめきを若き月日
しろんてくろ〜俗も娘も天命よまろ世くくをとのど
ゆうふりくらべ寿命の業とまり膳をくわぞ一徳ろろ
べ〜萬のくとふせうぐ〜きくいろくさろぐの人間の一生娘
婦の大務ろうさまとび敬人の巻刑よろこうまてろ
一首めり

世の中のけんどうとそなすぐ〜なる
時ろうすぎろたすまろ〜れず

第十二套

さくくもあんとうえくよ体るハまてろこうぐ家も隆まるの
おりりく主ろ君ろまとび番ろ代よかくくひて湯治ふ
ゆえ〜と世ろ人いく世今弁持るるお古ず祥くよいろう
て安産のわんぐとぐまんりぐ業ろ月くふ寿りておもふ
おとを世俗をろ〜海ろくふかりて海初を立てすも

ゐんとぐ　ゑををしらうてあのこと　豪農うく　豪農の
男うこと　赤ゐ　表も　ゑのこゑぞ　あるうぜん　源めでく　年寄
わるゐ　ゐ　苦労をうせ　ーうゐ　巻ゐ　そうゐ　ゐ　ゐ　ゐ
はくかくこさ　小豆粥　ゐ　小角豆　ゐうを　好こく　世世
ぞあまこと　濡ゐ　ぐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ぐく　日　く　ゐんとぐ　方へ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

ちやうこうしやうまでとまりぐるまかよいてくるゆう
ぐるまのめをかくるまてこのしやうをかくしかくれく
とわどけるこのつぎ姉妹のりちまくのとうつてゐる女図
主きこのの称きひきうこてこのこのこのこのこのこのこの
いわんで奥濃のこをあけてそのこと称き「ちうこうへ
まま濃さえうくあわのぐうこのゆのぐちぐふあのこのこのこの
ぐふうふ勿体をつけてあそくあのこのくとろ
ちつまあて赤るさんをあ抱ヨトいつあつ〜男吉へ産る

をあたく産ゆあをのでゆきゆ濃さんおもいわくとあく
あるさんをあぐたまとふまくどんあよくかく
あるのぐらく深ぐまふあくあまくあわ
まんわくあおえトあのうこのこのこのこのこのこのこの
らわくぐまのこのぐうまるのうここのこのこのこのこの
さんげあんるのをいひまくいトふどあおとおくきて
つけてうとと濃さえうこちくあのあのこのこのこのこの
濃のこのぐうくくまぐかくうのこのこのこのこのこの

やつるく月くるよかるうゆもうく月ぐくもえべあいくしたを
朝あやうよかうく住居うと中とるみいもぐるみとる
してくるを濡ちくとるぐり塩くひやの家者とうめ
もちぐ者くしたを朝右とるぐけこもの上とう調
あやうよ送りて彩くとあとと月朝日長者の者と
ありひなどしてのるあるべかる時とあうくようい
きすぐおいとい月を指とくうえでうたてもうきりうや
問あとづまろくびどよ乳ろくあをあごきたよくう

かくうくうきりひのうまとけぬ片あのえすくを
指ひあえ乳ようくあをきり西びきうあやくふ
濡ちうぐきうぐゆくくまびつる指うみくえ
暮の時あの者者もそまやの果和もあまびとを
いりようくうくと月とうまと例よ他人のあきと時ハきえ
もせぐる意ぐうくまふのうりのうとそぐうめの弟の
ニくぐゆのうさ長者きうきやれの月をぎろりうう
年うちてたや朝右ハみ秘ようりて今年ハ秘者の

いとまゐれば七月のころうちとけ上ものの
ぶりんゆうぐ出もとゐ源の好こふ和とぶ和を
はくしたまの元雲を仕ぶうぶゆで十二月中の又日
猪くるひやをとゐめ中源のくくをわつめ猪ひの猪巳
わぐぐとかるとと源へたのこうる料屋へ名よりへ人を
善のとうをのちくく猪猪屋熊敷を作くせ
のてゐへ酒述良林のとくくくこことふ和とぶ対
らひて今日調ゐやへよび新うる善善へ蜂玉門

善町よかくまゐわくゐ名とうの玉ゆ多うううで
一教猪とうかきゐうきこそのくくまづ猪川一堂ゐ手ゆ
子新善と玉善まで善の秘作のくく豆日と幅善ゐと
のちとむ和ぶぐ元女善善へ小ゐ多をとゐゆ猪
猪右 ゐ右 小糸 善右 大右 今助 とく 蜂玉門
通ゐ玉ぐぐくとまゐ月の和の玉へわりせさゐ善
う猪ゐゐへ善用ゐや清元の新手を難へその中ゐ
まこと今助ゐ新ち更新ゐの糸一中 富和 常盤猪善

のお江戸の名物ぞろへその日もくれまで酒のうわ言
うらやましがる孔雀も鸚鵡もうちまぜて枇杷や
養潤のこゑさへきこえる夜半の濤にかけて絃歌の曲
浮世よしやのことばもとんと絹ぶるひきこゆるのそのおり
うろ覚え音八さくら川里好ふ こまかいところまでござんすさくら川
さんの手ぎわ 川里 「ゆうきん 取日屋の地の森のことをおもひしる
里へのせき 善八「ゆうさん ありがとう ありがたい
ぞ頭り御ひいきのおかげで よろこばしい
あがり ゐよくあきらめましてありがたく

ひとつ 一昔まへより ゆうさん 三絃弾の名
人を あらはせよ 善八「ちつと三味線や おりかでおれのような
ある 物好 世やく其の中 おのれむりかしれねへが
喜んで 宮古路より ゆきげんがそう ゆうへの うたんざおなふし
ぞよとりのゝ 常ぐごまかせんでん 三味線まきの
名ぶりを あらはしーーヨ
作者曰 ここに桜川善好が新工夫の滑稽を
うけて居て芝居下座の三味せん ひきの名人

知音
集會
真心
志と

ありその仕方いかの芝居のこと作せんを落つづく
お客の喜ばり〳〵とうんとのづくもくうちのづくらづ喜ぶと
とたひく所のちさくとうの茶とその風ぞく
おもくくその極を寄ちく実よ座きの
一息ありう

さてもあるいゆきたくく酒屋の座へ出ざろーグ猪
のさ引者のこだり大田者後るのさーづと仕まいいるの
者を殺ごどとろせわくく示酒とさろうを出しその

分も家をわくくあて一間をいづくその茶とのく
いくるのやの移ろいい海るふひとくくのくふ
仕とひ〳〵仕安唐番いろとろるのとろけびくちるの藤
りくと者るのわくぬとでづくり男の酒よかるくろ
あるた酒もりくと元ろ年八十年も美学ろるる
きりやうくく餐のかざろもてとるづくくと見者へ洲
らくの寺と酒甲とくくとろ元雲へ仕まるのちろ
さた合示徹自示ぬのいの戸雑へ酒よふちろの実藤

りのうつくしきをいとおもしろくおもしろきに
いりの姿のふりの額つくりよ湯のしもせざるは薬
の弱出しもゆえそのつくろひ湯もの湯りもも涙
ちりめん巻の小袖の巻こ花巻よ湯巻こどもらの縁
仕くく湯付のふりの湯巻人物よ自の四ちもの絵
おの付多く神の山まの巻氣わくもそらよ出巻
めまくどもたりくさくろうつくめくぐ巻こどもら
ものくよ巻をくれわの廿とわまうふくだあるその巻ふ

すこしちくゆくくんくろげよおとをゆくよ巻絵
して　みちのくえん彩角おくわきゆてみの下花のくろ取
ゆくさどもくくめでどどいませうげせめて朝ちげのち
そうわとまくちくまくこ巻絵湯くくゆくくんくの額くわくして

祭ふーの系

湯のゆどまくくえふーの系巻めぐる能
日をくくくとひくの世の今さくふくちのの
ゆくん巻をゆくくあ巻のくどくくと人自巻

の源いうや流れ出きたるのゆうとごとくふ行くく
と糸のわやうまぬあつの組紐めとんきとえて
を出ごうの結んでとくうまくこうもひのごけた
まのいとゆかや
ぬいとぶ明りよりて帯よりまづまうあつ〜て扇の人ぐらちど
よどいと素をあげ蓋くるあるゆも塗るのつかとこ
蔵いるまとその中ふぬいとかのて差高ち〜同様ごと
をあいくく結ぶまて一間へいうまとうぶ結ぶのいさすぶ飛心

せるるまうをの出ゆうまくく知ものたりとうの流れ〜
どけ
流るとさ衣のはくりのあんまうぶれ〜ロロ春うく〜ち〜流
さんふりうくありてえ出るつのりぶらのりまとど
くえまらくぶもトうるくの中〜蓋うあっうく洋刺完
ちっくふてびいづるぬとぶ流みどうのつ出蓋のきうのくひ
流くさりとそぎ尼の紅白彩ものわくひすて彼を蓋衣
蓋よのうくて貞きうくまどのこ垣二ぶうくのハ本流の白
ぬとゆまぶまき紋流のけさをうけ水鳥の撮教れぶうく

[illegible]けばまつ[illegible]のあるどうく[illegible]
いくとどうゆとどう[illegible]
たりぎ[illegible]ときんおまつ[illegible]
おれよおろこのでよろまいぶよおろうぶ[illegible]
どぎこいまくすぶよかういよおそよ[illegible]
おろやおろ[illegible]のとくくろでとんこぶふちうませうう
との朝[illegible]をぶるしてるそのとくくぬいうぶく
くーるいぶ[illegible]のろ[illegible]

の[illegible]ろ[illegible]くくとおまでとくーー黄とろひ
ぶーーぶのやうのきもぶくくーーとおぶろうのいうぶ
らをぶよいいいいぶのらもぶまくろくろぶ
[illegible]の白くくとぶ[illegible]
いまくくをいうぶとおうのとろのどのまでぶくー
ぶれしくくうとぶどいいぶどおぶくくでどぶませう
ぶとの世の夢のうんおうとんおまどうのまどけぶ
今ううぶいおまのいまくくーーぬおまとうくーぬおまぶ

びきさきの代官ゆかつてゆかつて
ゆくゆくとやーめーこそあるべくさるべくお使言とふ是ゆゑ
きんと深さうきんい二郎の妻世話するどもあくのはそこらを
あるべくやーあげまさるべきんどのお弟ごとかあり
ゆーわづかあげまいとうとつづくく一間へいり金仏
こ猫の深ゆ尾とあるーさぞかくて居ゆめでこきと
まこあるいまこさのとうぐくふいとうをつづけてあるこふかゆり
ゆえーづ深さう第千言あるちいうくとおづえてあるく

お世をあきこあーー男とづるひ所とうあへ
わづこまこうー一郎うちょうく両家の業をさうひ
つ一門きんだ母うあ世ーーとぞこの時あいこへふの
一論業のかんざーを遠年ようて知ういーと号書
あくへあきあわづ長年へ功名をいーー考
若あるうーをかうひとくよ商業をさうて
ほーーこと九十余年の長寿ようて松月庵といく
おそめでくも深うーーとぞく

此家のあるじ[illegible]「[illegible]」の
[illegible]とのゝて絆をわすれのこ

拾遺玉川巻の六大尾